変形文法の次に来るもの

ベルナルド　サン・ジャック

これまでにも変形文法に疑問を持った言語学者がかなりいたことはよく知られた事実である。このことを例証するには次の論文を引用することができよう。まず筆者自身の，M. ポスタルによるA. マルティネの *Elements of General Linguistics* (1967年 *Foundations of Language*に掲載) の評価[1]に対する批評[2] (1967)，R. ハドソンの *Arguments for a Non-Transformational Grammar*[3] (1976)，C. アシェーズの *La grammaire générative, réflexions critiques*[4] (1976)，そしてM. グロスが *Language* に寄稿したすぐれた論文 "On the Failure of Generative Grammar[5] (1979) 等々である。

しかし，上に挙げた数々の論文も1979年3月に米国ミルウォーキーのウィスコンシン大学で開催された "Conference on Current Approaches to Syntax" (構文の現代的研究に関する会議) ほどの大きな影響を与えたとは言いがたい。変形文法が生まれ，それが発展したのは米国の多くの大学においてであったが，このウィスコンシン会議ではその各学派を代表する言語学者の意見が発表された。ここでは，以前に変形文法の発展に貢献した，その同じ学者たちが，今度は変形文法に批判的な見地に立ち新しい理論を発表したのである。ウィスコンシン会議から2年たった現在でもなお変形文法理論の厳密なフレームワークのなかで人間の言語を分析しようとすることが果して妥当かどうか，大いに疑わしいというのが筆者の個人的な見解である。

会議に提出されたペーパーや発表後の討論で明らかになったことは次の点である。

1.　変形文法の基本概念の多くが否定された。例えば，文法分析にとっては表層構造の方が深層構造よりもその重要性が高い。したがって，変形操作は必要でなくなり，表層文法と深層文法の区別も重要ではなくなる。また，文法性 (grammaticality) と容認可能性 (acceptability) の違いはもう必要ではない。容認可能性という概念は，情報をはるかに多く提供するという点において文法性よりも価値の高いものである。さらに，言語使用における興味ある観察はほとんど運用 (performance) の領域に入るものであるから，competence (言語能力) と performance (言語運用) の区別も必要でなくなった。

2.　このウィスコンシン会議で提出された新理論の多くが，例えば英国のM. A. K. ハリデーやフランスのA. マルティネに代表される「機能言語理論」に近い基礎理論をまとめたものであった。

機能言語理論においては，話し手が伝達したいと思っている自分の体験を構成する種々の部分が特定の順序に並んでいる，その中に，その言語の基本的にして特徴的な性質が存在していると考えるのである。この構成部分の順序が言語レベルにおいては機能に相当するものである。言語の根本的な目的は，話し手の体験を聞き手に伝達することにあるのだ

から，こういう説明は別に目新しいものでも何でもない。

3. これらの「新理論」には社会言語学の影響が顕著にあらわれている。たとえば，

①「理想的な話し手」(ideal speaker) の概念は，個人的な特徴やスタイルや地域的特徴（方言）を持った「言語使用者」という概念に取り代えられる。というのは，言語地域社会は等質的ではないからである。

②文の文法性に関する「直感」(intuition) と「内省」(introspection) は，文法分析のデータとしては十分なものではない。会話または語り (narrative) における具体的発話をこそ文法分析のデータとして使うべきである。

③言語は人間の特質であるだけではなく，何よりもまず伝達の手段であるということ。社会的な交際 (interaction) における伝達の手段としての言語を観察することこそ人間の言語を理解するのに最も大切なことだと思う。

上記の3点に焦点を当てつつ，ウィスコンシン会議で発表された「新理論」を明確に分析することが本論の目的である。

ウィスコンシン会議で発表されたものの，変形文法学派以後のものとは考えられない tagmemics に関する発表と，stratificational theory の発表はここではとりあげないこととする。また，R. クーパー (Cooper) のモンタギュー文法理論は哲学的な興味の分野になるので，同様にここでは割愛する。最後に，D. パールマター (Perlmutter) の relational grammar についても，ウィスコンシン会議の参加者に発表の要項が配布されなかったので，言及を控えることにする。

なお，ウィスコンシン会議で発表されたもののうち，ただ一つだけが変形文法に関するものであった。それは，N. チョムスキーの trace theory に関するもので，これには何ら目新しいものはなかった。

結局，ウィスコンシン会議における9名の発表について，以下にその一つ一つをとりあげて，その概要を述べ，筆者の見解をも添えることとする。

#1 Role & Reference Grammar

Robert D. Van Valin, Jr. (Temple University), William A. Foley (Australian National University)

RRG と略されるこの Role & Reference Grammar の特徴は，一般的に言って，文法記述を機能的にアプローチしようというものである。それは，文法素と構造を主に一言語体系の内の機能的役割によって分析し，二次的に，それらの文法形式の特性 (formal properties) によって分析するということである。

「研究すべき最も大切な点の一つは，言語機能 ([communicative] function) と文法形式 ([grammatical]form) の間の関係で，特に，ある一つの形式が種々の機能を持ち得，また同じ機能を全く違う形式によって果すことがなぜ可能なのかということである」(One of the major questions to be investigated is the relationship between (communicative) function and form, in particular, how the same form may have different functions and how the same function may be carried out by different forms.) この発表者の目

的は両者の関係を明らかにすることにある。ところで，上記の引用は1962年にA. マルティネが書いた次の部分を思い起こさせる。「一つの言語の特性を表わす各々異った機能のすべてを知ることは絶対に必要なことであるが，同じくらい重要なことは，それぞれの言語にとってどの形態素 (monemes) がその機能を果たすのに適格であるかを決定することである。(It is quite essential to know all the different functions that characterize a language, but is equally important to determine for each language, what monemes are qualified to perform this or that function.)[6]

この発表者たち——ヴァン・ヴァレンとフォーレー——は，フィリピン，オーストラリア，北アメリカの土着の言語を分析するための必要性からこの理論を発展させたと説明している。これらの言語の分析も，研究上出てきた種々の問題も，彼らの文法的アプローチの展開に直接役立った。正に，そのことは RRG に現実性と実用性のあることを表わしている。同様に，言語の機能は人間の思考の自由で，創造的な表現であると主張するチョムスキーの立場に関しては——そしてチョムスキーのこの主張はデカルトとフンボルトに従っているのだが——J. R. サールが，言語は本質的に伝達の手段として考えるべきであると主張して，チョムスキーと正反対の立場に立つ。[7]

このことに関して，RRG 論者ヴァン・ヴァレンとフォーレーは次のように述べている。「チョムスキーの文法概念か，それともその正反対の立場をとる J. R. サールの見解か，そのどちらがよく言語の真の機能を説明するかについて討論することは意味がない。それは，人間の言語には伝達以外に種々の目的があるからである。ある一つの機能だけを主張する代りに，次のような問いをこの論争に投げかける方が妥当であると考える。すなわち，もし伝達が言語にとって二次的で非本質的な機能でしかないのだとすれば，果して人間の言語は現在あるこの構造を持ち得たであろうか？　つまり，世界中の多くの言語に見られる特徴について，まず社会的な出来事としての伝達に関連させて説明するのと，N. Chomsky が言ったような，人間の思考の本質に基いて説明するのとどちらがいいだろうか？」(It seems fruitless to argue that one or the other of these is *the real* function of language, in light of the many purposes human language may serve. Rather than simply declaring something to be *the* function of language, we feel that a better way to approach this controversy is to ask the following question: Would human language have the structure that it does if communication were only an incidental, non-essential function? That is, are there features found in a great range of the world's languages which are best explained in purely innate psychological terms, or with reference first to communication as a socially constituted event regardless of its ultimate psychological source?)

ヴァン・ヴァレンとフォーレーにとっては，社会における交際の手段としての伝達こそが人間の言語を理解するのに絶対必要なことなのである。

RRG は，その基本原則のほとんどを変形文法のそれに対応させて定義している。したがって，機能的立場から見ると，前後関係 (context) を欠いた文やそれから独立した文の文法性についての内省的判断は言語分析にとって充分ではない。したがって，RRG の

（4） 変形文法の次に来るもの

理想的な文法分析のデータは，実際に発話された会話ないしは語りから得られる。運用レベル (performance level) における言語の発話が言語学の正当な対象であるということを拒否するなどということは，RRG 理論家にとっては承認できないことなのである。「実際には RRG が説明しようとしている現象の多くは言語運用の領域内のものであるから，変形文法において定義された本来の言語研究には入らない。」(Many of the phenomena which RRG seeks to account for fall within the domain of performance and are therefore not part of proper linguistic inquiry as defined in Transformational Grammar.) したがって，RRG においては，チョムスキーの competence と performance の対立は成立しないのである。

変形文法にとって基本的なもう一つの対立である文法性と容認可能性も——これは上記の言語能力と言語運用の対立と密接な関係にある——根本的に変えなければならない。変形文法では，文法性は，発話の形式的特性 (formal properties) との関連において定義されており，容認可能性は発話の意味論的特性 (semantic properties) との関連において定義されている。しかし，RRG 学者の文法論によると，この区別は充分ではない。例えば，かのよく知られた文 "Colorless green ideas sleep furiously." を変形文法学者は文法的 (grammatical) とみなした。しかし，ここでヴァン・ヴァレンとフォーレーは一つの新しい概念，すなわち文脈妥当性 (contextual appropriateness) を導入して，この文は文脈妥当性がないとする。容認可能性と深い関係を持つこの概念は，RRG 論者の主張によると，文法分析において最も重要なものなのである。

#2 Equational Rules & Rule Functions in Syntax

Gerald Sanders (University of Minnesota)

この理論も機能文法理論と最近の社会言語学にその基礎をおいている。言語の本質的な目的は，一個人の体験を話し手が相手に伝達することにある。「自然言語は体系的に音と意味を関連づける文化的な手段であり，これはその社会の構成人員が効果的に伝達を行うためのものである。」(Natural languages are cultural instruments for the systematic association of sounds and meanings for the purpose of effective symbolic communication by the members of human societies.)

発表者のG. サンダースは，言語機能の分析と，これらの機能を表わす言語形式の分析とが言語理論の基本であると主張する。「言語の（伝達の）手段としての機能と，その機能を構成する言語表現および文法規則という，言語にとって最も重要なことがらを考慮に入れない理論は，真の言語理論とは言えない。この点をはっきりさせるために次の例を出すことができよう。飛行機の機械的な特性や，飛行機に乗る人々の心理についてしか言及しない飛行理論であれば，それは飛行機の機能の真の理論とはなり得ない。というのは，飛行機が飛行機であり得るのは，本質的にその機能としての性質によるものだからである。」(A linguistic theory that failed to take crucial account of the instrumental functions of languages, and of their constituent expressions and constituting rules of grammar, would simply fail to be a real theory about language at all, in fact, in precisely the

same sense that a theory referring only to the physical properties of airplanes, or the psychology of airplane-users, would fail to be a real theory about airplanes. For it is in the nature of instruments that they are what they are essentially because of their functions.)

言語学において唯一可能な言語理論は，言語学的事実に基いているものでなければならないというのがG.サンダースの確信である。さらに，サンダースは，理論と言語学的事実との間に，または仮説と言語学的事実との間に緊密な関係がない場合には，どういう文法理論によって解釈するかについて論ずることはできないと述べている。もしそうでなければ，理論の妥当性を論ずることは無駄となり，理論的背景もなくなって，それは無益なただの論争になり下がるのである——そしてこういうことが最近の言語学界でなされてきたのである。彼は続けてこう述べている。「合理的または実質的な研究ないし議論は，特定の言語か人間の言語一般についての観察に基いた主張に演繹的に関連づけられていなければならない。」(There can be no rational or substantive inquiry or dispute concerning matters that are not deductively linked to observation statements either about particular languages or about human language in general.) 「そして言語学において——つまりそれはは科学全般について言えることであるが，——唯一可能な理論は言語学的事実に基いていなければならないのである。」(In linguistics, in short, as in all other sciences, facts are the name of the game, and factually-based argumentation is the only legitimate way to play it.)

#3 Basic Principles & Application of Functional Grammar

Simon C. Dik (Institute for General Linguistics, University of Amsterdam)

「機能文法の基本原則とその適用」というこの題が示すように，この機能的文法(FG)は言語の機能的概念に基礎をおいている。「言語はまず第一に，ある人間が他の人間と互いに伝達する(communicate)手段と見なされる。」(A language is regarded in the first place as an instrument by means of which people can enter into communicative relations with each other.) 「……したがって，言語は主に実用的な活動なのである。というのは，言語は伝達目的を持った象徴的手段ないしは道具なのである。ゆえに言語の構造は，この実用的目的を考慮に入れないと充分には理解され得ない。」(The structure of language cannot be adequately understood when these pragmatic purposes are left out of consideration.)

ある意味では文法は意味論に従属しているのであるから，この機能的な見方においては意味論から独立した文法は考えられないということを強調する。事実，言語地域社会のメンバーは，文法的形式を用いることによって，個々の独立した語よりもいっそう高度で複雑な意味を表現するのである。言いかえると，文法と意味論というものは，話し手がそれぞれ言語の意味に微妙な色合いをつけて，言語地域社会の他のメンバーに伝達するために存在するものなのである。ゆえに文法と意味論は実用論(pragmatics)に従属しているのである。C.ディックは，「文法は意味論に従属し，意味論は実用論に従属する。」(Syntax

is subservient to semantics, and semantics is subservient to pragmatics.)「機能文法は伝達能力 (communicative competence) における文法的要因 (grammatical factors) の理論と見ることができる。」(Functional Grammar can be thus viewed as a theory of the grammatical component of communicative competence.)

社会言語学者のすべてがそうするように，C. ディックも発話の容認可能性と容認不可能性 (unacceptability) に関する直感的な判断を認めている。しかし，あいまいな場合においてはこのような判断によって決定することはできない。一般的に言って，インフォーマントにとってコンテキストから独立した発話が容認可能か不可能かを判断することは非常に困難となる。そのインフォーマントが言語を分析する言語学者自身になると，今度はその判断が自らの言語理論に影響されるという危険が伴うのである。したがって，ディックは，実際的な伝達の場面で書かれた，または発話されたものを収集した言語データを使用すべきである，と提案している。これは人間が実際に生活の中で，いかに言語を使用するかということを知る最良のデータである。また，文法論者はときどき心理学的な実験の結果ないし通時的な情報からもデータを集めることができる。人間の言語は固定されたものではないという考えを文法理論家は無視してはいけない。ディックは，言語が，民族・時間・空間を通じて変化し続けるものであるという基本的な特性が言語学によって説明されねばならないというのである。

#4 Functional Syntax

Susumu Kuno (Harvard University)

久野暲は二種類の文法の存在を認めている。一つは構造的関係を分析する純粋文法である。もう一つは機能文法と言って——社会言語学的文法と呼ぶこともできようが——その分析の中に純粋文法のみでなく，言語の伝達機能を含めるものである。久野は，言語学者はこれら二種の文法を考慮に入れるべきだという。文法理論において，伝達機能に無知であっては，または，伝達機能を無視しては何も得るものがないから，文法理論の学者はすべて，機能文法理論の学者でもあるべきである。したがって，近年の文法分析における態度——すなわち，伝達に必要な事実を充分に考慮に入れない態度——は，文法理論を偏狭なものにしてしまった。このことについて，久野は次のように述べている。

「過去10年における文法理論の展開を私は次のように評価している。純粋文法理論の学者がとりあげる研究対象の視野はますます狭くなり，その使用するデータはますます小さくなり，かれらの文法理論もますます現実の言語使用から遠ざかるものになってしまった。」(My own evaluation of what has happened in the past ten years in syntax is that the focus of research interest of pure syntacticians has become narrower and narrower, the data that they deal with have become smaller and smaller, and the generalizations that they come up with, further and further removed from reality.)

どんな言語についても，文法規則を条件づけるのに基本的な役割を果たす伝達事実というもの (communicative facts) が存在する。例えば旧情報 (old information) に対する新情報 (new information) の概念とか，その文が何について述べているかという主題 (theme)

に対して，文中で新情報を提供する役目の要素である焦点 (focus) の概念とかである。これらの概念は，言語の文法構造からは独立したものであって，伝達の行われる環境によって決定されるものである。そして，これらの事実は文法的事実として説明されねばならない。例えば，日本語の助詞の「は」と「が」がそれである。「は」と「が」の対立は，話し手がある場合には新情報，別のある場合には旧情報を提供するためのものである。

#5 Realistic Grammar

Michael K. Brame (University of Washington)

RG は機能的文法とも呼ばれる。他の言語学者，例えばJ. ブレスナンやC. イルディリ[8]ムらも一般的に言って，このM. K. ブレームと同じ傾向の考えである。M. Brame の RG は，チョムスキー理論の最新の訂正である *trace theory* からも大きく隔った理論である。まず RG では，表層構造と深層構造の区別を認めていない。したがって，変形操作は完全になくなっている。そして文法分析は表層のレベルでなされる。言いかえれば，伝統的な変形操作は発話に直接加えられる解釈に取り代えられている。M. ブレームはこれを Direct Interpretive Approach と呼んでいる。

#6 Corepresentational Grammar

Michael B. Kac (University of Minnesota)

CORG におけるM. B. カックの主張は，上述の文法と同じく一つの構造レベル——表層——しかない。彼は深層構造という概念を拒否して，次のように言う。「変形生成文法におけるような深層構造という抽象的なレベルはないものとする。」(There is no "abstract" level of "deep" or "underlying" structure as in transformational generative grammar.)

M. カックの立場は変形文法理論にとって最も基本的な原則とは正反対の位置にある。言いかえれば，表層構造が構文分析において真剣に扱われるべきだというのである。(The most important claim made by CORG is that surface structure deserves to be taken seriously in syntactic analysis.)

CORG における言語記述と文法論は，一般的に機能言語学のそれに類似している。

#7 Epiphenomenal Syntax

James D. McCawley (University of Chicago)

J. D. マッコーレーがこの題を選んだのは，われわれが「文法」と呼んでいるものは，通常文法の領域に入らない要素を含んでいるからである。J. マッコーレーは文法性と容認可能性の区別を拒否している。そして容認可能性の概念の方が，文法性の概念よりも価値の高い情報を提供するというのである。(If you know that an item is unacceptable, you've got much more interesting information than merely information as to whether it is grammatical.)

J. マッコーレーは，発表のとき，最初に，聴衆が ES を生成意味論的な性質を有して

いると言っても別に反論するつもりはないと述べた。ところで，彼が強調していることは，自分が考えている言語学の概念は過去8～9年の間にかなりの変化をとげたということである。(I won't be hurt if you call what I'm doing "generative semantics", but you might mislead others into believing that I take the same stand now as I did 8 or 9 years ago as to the relations among semantics, lexicon, and grammar.)

言語学の概念の変化というのは，次のようなことである。J．マッコーレーは，どの言語レベルでも——表層構造，深層構造，または意味レベル——ある一つを文法理論の中心とし，他のレベルのすべてがその反映であるとする考え方を採らないとした。また，言語が文の集合体 (a set of sentences) であるという考え方も拒否した。さらに，言語学者は言語学において純粋に言語学的なデータをのみ使用しなければならないという考え方も認めないと述べている。

#8 Daughter-Dependency Grammar

Paul Schachter (University of California, Los Angeles)

P．シャフターによると DDG は依然として発展しつつあるということである。DDG の起源は明らかに論争術 (polemics) に見出すことができる。R．ハドソンの1976年の論文[3]には，DDG について詳細な説明があるが，R．ハドソンの目的はまず最初に，変形文法の不充分な点を明らかにすることにあった。DDG の最も重要な点は今までに見て来た種々の論文と同様に，文法構造は一つしかないということである。(There is only a single level or stratum of syntactic structure, rather than the set of levels or strata postulated in certain other theories (for example, the several syntactic levels 'underlying, shallow, surface', etc... of transformational grammar.)

さらに，変形文法におけるような変形操作は DDG には存在しない。

#9 Cognitive Grammar

George Lakoff (University of California, Berkeley)

CG についての論文を提出するはずだったG．ラコフは，病気のために会議には出られなかった。氏の代わりに，MIT（マサチューセッツ工科大学）の J．ロス (Ross) が自分の考えの特徴を述べるとともに，G．ラコフの CG についての研究を発表した。ロス・ラコフの研究の方向は，文法理論に大きな変革をもたらしたことを意味する。文法理論も物と人間との関係において構成しなければならないというのである。(One of the important things which I haven't emphasized is to realize that in order to explain linguistic phenomena one has to assume that the previous traditional view of logic-axiomatic theories, etc. was wrong: the properties are not predicate in an axiomatic system. Rather, what George Lakoff views properties as is as relations between objects and beings.)

結　論

機能言語学の訓練を受けた言語学者か社会言語学者であれば，必ずや，このウィスコンシン会議が終わったあと二つのことを感じたであろう。一つは——もしこれがまだ気づかれていなかったとすれば——A. マルティネが言った「アメリカ言語学の帝国主義」(L'impérialisme linguistique américain)[9] も終局を迎えたということに改めて気づいて安心したこと。近年の言語学的研究がすべて変形文法の時流に乗ったものであり，それ以外のものはほとんどすべて浅薄な理論[1]と見なされてきた事実はそう簡単に忘れることはできない。表層構造的な事実を扱う理論は軽蔑され，学問としておもしろくないと判断され続けてきたことも忘れることができない。

もう一つは，言語学者たちがこのウィスコンシン会議において，このように重要な役割を言語の機能——言語の伝達の手段としての機能あるいは言語の文法的な機能——に与えることを許したということを知って喜んだこと。こうした理解——遅ればせながら，というべきかも知れないが——それが言語の科学的研究のいっそうの発展と貢献に寄与するであろうことを筆者は信ずるものである。

引 用 文 献

1) Paul M. Postal, "Review of Martinet's *Elements of General Linguistics*, *Foundations of Language* 2, 1966.

2) B. Saint-Jacques, "Review of a Review", *Foundations of Language*, 3, 1967.

3) Richard Hudson, *Arguments for a Non-Transformational Grammar*, University of Chicago Press, 1976.

4) C. Hagège, *La grammaire générative, réflexions critiques*, PUF, Paris, 1976.

5) M. Gross, "On the Failure of Generative Grammar", *Language*, Vol. 55, Number 4, Dec. 1979.

6) A. Martinet, *A Functional View of Language*, Oxford, 1962, p. 63.

7) John R. Searle, Speech-Acts, *An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge, University Press, 1969.

8) J. Bresnan, "A Realistic Transformational Grammar", *Linguistic Theory and Psychological Reality*, ed. By Halle, Bresnan, and Miller, MIT Press, 1978.

C. Yildirim, *A Functional Interpretive Approach to Turkish*, University of Washington Doctoral Dissertation, 1978.

9) "Ce qui a nui et continue à nuire au développement et à l'extension de la linguistique fonctionnelle est l'existence d'un impérialisme américain qui tend à imposer aux spécialistes du monde entier une vision manichéenne où tout se ramène au conflit entre un distributionalisme simpliste et un générativisme arrogant qui a su impressionner les foules par l'emploi d'un appareil logico-mathématique et attirer les naïfs en jouant de termes aguichants de 'créativité' et de 'structure

profonde'." "Pour une linguistique des langues", *Foundations of Language*, Vol. 10, 1973.

この論文を準備するにあたって国際交流基金の援助を受けたことをここに記し，感謝の意を表します。(Grant No. 55 PE 914)。なお，この論文の翻訳は篠田愛理嬢（東京理科大学講師）をわずらわした。ただし，本誌に発表するに際して，さらに柴田武氏（埼玉大学教授）に全面的に筆を入れてもらった。両氏の御親切にも感謝の意を表します。

——ブリティッシュ・コロンビア大学教授——